

最優秀賞

「お母さんへ」

青森県 ^{よこかわ}横川 ^{あやか}綾香さん 中学3年生

「あやちゃん、おかえり。」ノートに文字から母の声が絵と共に聞こえてきそう。

共働きの為、鍵っ子になった小三から毎日母は絵日記の連絡帳を書いている。今は、八十冊目となり、我が家では「ブログ」と呼んでいる。今夜のおかずや出来事が書いてある。震災の様子・ニュース、イベントや誕生日、そして怒られる私の事も書いてある。

私は帰宅するとまず、ノートを読む。それは父

も同じで、我が家の日常。夕食の時、家族でブログの内容をきっかけに会話も弾む。ブログは我が家の歴史となっている。

母に聞いた事がある。「いつまで書き続けるの？」と。母は「書けなくなるまで書き続けるよ。」と笑っていた。

スマホが普及する中、母の手書きの文字や絵から温もりを感じる。中三になった今、私はその事を感じられる。お母さんありがとう。

審査員のコメント

●共働きの家族における工夫としての絵日記の活用が、ブログに代わっての温かい家族の絆構築の一つとして見事に表現されています。(橋本先生) ●手書きでのやり取りは温かさを持っており、また、蓄積された記録は、家族にとってかけがえない思い出となる。ブログは、素晴らしい活動である。(坂元先生)

優秀賞

「忙しい母の立ち話」

香川県 ^{かねこ}金子 ^{あき}在さん 中学2年生

うちは四人兄弟なので、母はとても忙しい。風呂掃除や洗濯たたみなどは当番制で私たちも手伝うが、それでも母は忙しい。いつも家じゅう走り回り、時々ネジが切れたみたいにおぼろげに倒れ、へんな場所でうたた寝している。

そんなに忙しいのに、母はお向かいさんとの立ち話が好きだ。ほとんど天気か献立の話。たまにお孫さんの話。はっきり言って濃い内容ではない。が、そこが遠方の祖父母との会話に似ていて、良いんだそう。

その立ち話が、ある夕方、珍しくアツくなった。妹が鍵デビューしたのだが固くて開けられず、お向かいに駆け込み、奥様も開けられずだんな様を呼び、ようやく開いたらしい。「私たち二人ともどろぼうにはなれないねって大笑いしたのよ」と奥様が笑い、母が「本当に助かりました」と何度も頭を下げる。

それを聞きながら夕焼けを見上げ、遠方の祖父母も元気で近所の小学生を助けてくれていたらいいなと、祈るように考えていた。

審査員のコメント

●今ほとんど消えうせた井戸端会議、向こう三軒両どなり、隣保班(となり組)などの言葉を思い出させてくれるほのぼのの作品です。タイトルも素晴らしく、となり組はもちろん、家族の絆が見事にあらわされています。(橋本先生) ●家族で協力しあって暮らす忙しい毎日の、ちょっとした日常を切り取って、いきいきと表現してくれました。立ち話ができるということは幸せなことなのだ。普段の立ち話が、「いざという時」の助け合いを育むのですね。(松田先生)

優秀賞 「京都嵯峨の地に育てられーラグビーとの出会い」

京都府 児玉 宜伸^{こたま よしのぶ}さん 中学3年生

人は一人では生きられない。実感である。地域の方々との出会いの中、僕はお金では買えない貴重な時を過ごすことができた。

三歳から嵯峨の地にある「京都西ラグビースクール」に所属し、ラグビーの楽しさと、今という瞬間を大切にする生き方のヒントを学んだ。壁にぶつかると、練習で着ていたシャツに刻まれた「Try Our Best.」の文字を思い出す。「全力で魂を打ち込んで今を生きよ」というメッセージが聞こえてくる。スクールでは何事も自分で考

え、判断し、行動することの大切さを教えられた。合宿では、ふんどし一枚でウオークライ(war cry)を演じるなど、非日常的な経験を重ねた。おかげで、何事にも果敢にチャレンジし、積極的に行動する自信を得た。スクールでの貴重な経験は、今後の人生の基盤となるだろう。お世話になったスクールの方々に、「ありがとう」と伝えたい。

将来、地域の人間として、次世代のこどもたちの成長に貢献できるように頑張りたい。

審査員のコメント

●「人は一人では生きられない。実感である。」この書き出し文にノックアウトされた。ラグビーの楽しさと今という瞬間を大切に

する生き方のヒントをもらった京都西ラグビースクールへの感謝の気持ちが、畳みかけるリズムカルな文章によって見事に鮮やかに表現されている。(内田先生) ●今という瞬間を大切に

する生き方、という言葉に、はっとさせられました。日々チャレンジする姿勢はとても素敵です。これからも「Try Our Best.」を胸に何事にも前向きに取り組んでいってください！(松田先生)

優秀賞

「新しい家族」

鳥取県 寺坂 唯吹^{てらさか いぶき}さん 中学2年生

昨年十一月に母の妊娠が分かった。最初は冗談かと思ったがエコー写真を見て本当だと感じた。僕にはすでに二つ下の弟が一人いるがもう一人弟がほしかったので男の子がいいなと思った。このときとても嬉しかった。

それから母のお腹が少しずつ大きくなってきて中で動いているのも分かるようになった。このころ弟だと分かって母が妊娠した時よりも嬉しかった。元気に生まれてほしいと思った。

今年の七月に弟は産まれた。その日から家の畳を替えたりベビーベッドを組み立てたりした。早く家に帰って来てほしいと思った。母と弟が帰って来た日、弟を可愛がった。歳がはなれている分

しっかりしなければならないと思った。二つ下の弟もおそらくそう思ったにちがいない。

それから一週間程たった日に初めておむつを替えさせてもらった。思っていた以上に難しく、泣かせてしまった。これから上手になるよう頑張りたい。

弟をずっと見ているとも見あきないし、少し元気がないと病気ではないかと心配になる。弟が何をしても可愛く思え、親バカならぬ兄バカだと思った。兄として弟が自分の悪い所を真似しないように短所を直しながら一諸に成長していきたい。これから家族皆で協力して見守っていきたい。そして将来、立派なイクメンになりたい。

審査員のコメント

●筆者が弟を迎える喜びと期待がふくらんでいく様子がよくわかる作文である。とうとう兄になった。弟は何をしても可愛い。よいモデルにならなくてはとの決意もほほえましい。きっと将来は立派なイクメンになるだろう。文章構成力が高く読むものを惹きつける作品である。(内田先生) ●新しい弟が生まれたことに対する感慨や心情がつぶさに感じ取れる作品である。小さな子供に接触することは、自分自身が親になることに対する考えを深め、貴重な体験であろう。(坂元先生)

優秀賞

「酸っぱい温かさ」

岩手県 ^{ひらた}平田 ^{みれい}美礼さん 高校2年生

春、私の家の庭には可憐な白い梅の花が咲きます。引越してきたときに植えてから、毎年梅の花は、目を楽しませてくれるだけでなく、春を感じさせてくれる匂い、嗅覚でも私達家族を楽しませてくれます。この庭の梅の木には、とても思い入れがあります。七月になると、透き通った黄色の梅の実がなります。収穫の時期は毎年梅の実を食べにくる、鳥がやってきたときです。この鳥が来る時が一番梅の実がおいしいからです。その梅の実を、父と一緒に収穫して色々なものを作ります。特にも母が作ってくれる「梅ジャム」は夏の暑さにも負けない健康な体を作ってくれる元となり、とてもおいしいです。

父とは去年一緒に梅酒を作りました。今年これを開けて、とてもおいしくできた梅酒を飲む父の笑顔で私も嬉しくなりました。まだお酒を飲める年齢ではないので、二十歳になったら自分で作った梅酒を飲んでみたいです。そし

て、たくさんある梅は、祖母が私の大好きな梅干しにしてくれます。家族で色々な物を作るのはとても楽しいです。

梅の酸っぱい味は家族がつながり、温かさを教えてくれました。また、春の花見と言えば桜が定番ですが、私の家族は毎年、茶の間から見える梅の花が定番になっています。私も含め兄弟の成長を見守ってくれ、家族と一緒に成長している梅が、これからも綺麗に咲いてくれることを願います。

みなさんは白い梅の花言葉を知っていますか。「気品」だそうです。

私は昨年、高校生になり、沿岸にある家を離れて内陸の高校の寮で生活しています。梅の花のように、成長していく中で「自分の意思をしっかりと持った、気品のある女性」になりたいと思います。

離れて暮らす家族に感謝して！

審査員のコメント

●梅と桜は日本人が好きな花です。家族みんなで梅の花を觀賞し、梅酒まで作っている。梅は家族の絆を作る役割を果たしています。花見は桜が定番ですが、この家族は梅が主役です。梅の花言葉は「気品」だそうです。気品を持った女性を目指して下さい。(明石先生) ●梅の実にまつわる数々のエピソードにうっとり。離れて暮らしていても、こころに咲く梅の花が、家族をつないでいてくれるでしょう。「自分の意思をしっかりと持った、気品のある女性」にぎっとなれますとも！(松田先生)

優秀賞

「天国の父へ」

千葉県 ^{やまく}山来 ^{まい}舞さん 中学2年生

いつもありがとう。そしてごめんなさい。それだけを思い、私は仏壇に手を合わせる。父は何も言わない。

生前の父は、心臓を患っていた。それなのに誰よりも私と姉のことを思って、入退院を繰り返しながらも仕事をしてくれた。

私が、「買い物に行きたい。」と言えば、すぐに連れて行ってくれた。どんなに仕事で疲れていても……。人間関係がうまくいかず、学校を休みがちな私を心配し、役場に私にも行ける学校

がないか探して動いてくれた。

なぜもっと早く大切なことに気付かなかったのか。たった一人の大切な父。父を失ってはじめてどんなに愛されていたかに気づく。生前の父に、「ありがとう。」と伝えていたら少しは父の思いに報いることができただろうか。今の私にできることは、父への感謝の気持ちを忘れずに、自分を大切にして、天国の父を安心させてあげることだと思う。

審査員のコメント

●父親を失って初めて気づく父親の愛情とふところの深さ。生きているときに言いたかった感謝の言葉。筆者の思いは心に響き、感動がわきあがってくる。天国のお父さまは、悲しみの中から立ち上がり、歩み始めた貴女を知って安堵されたに違いない。素敵な作文をありがとう。(内田先生) ●亡くなった父親の仏前で手を合わせる姿に感服です。幼児期には手を合わせることはよくみられます。しかし、思春期になるとそうはいきません。亡き父親に対する「ありがとう」の感謝がにじみ出ている文です。天国のお父さんも喜んでいでしょう。(明石先生)